

YAMANASHI
DISCOVERY
MAGAZINE

VOL.

11

2018

SUMMER

山梨

てて

teku-teku

くく

| 特集 |

山深き里で生まれた
黒く輝く雨畑硯



てて
Teku-Teku
くく

『山梨てててく』は
歩く速さでじっくりと

山梨の魅力を紹介していきます。

古くから文人墨客に愛用されている「あめはたすずり雨畑硯」。

今回は、雨畑硯の歴史と、

郷土の文化を愛する人々の思いに触れながら、

早川町雨畑を中心に『てててく』。

こんな山梨があったんだ、と思える発見や感動を

見つけていただけたらと思います。

VOL. 11

CONTENTS

| 特集 |

山深き里で生まれた
黒く輝く雨畑硯

03 雨畑硯

七百余年にわたり愛されてきた和硯の銘品

04 日本人の美意識と硯

06 硯文化を守り育む現代の名工

「てててく」伝

08 和硯の銘品「雨畑硯」の歴史

「てててく」食

心をほぐす優しい味わい。

12 雨畑の自然が育むオーガニック紅茶。

「てててく」住

14 ご縁を紡ぎいつの日か

地域の魅力を伝える宿を

「てててく」甲斐の図

16 身延駅（雨畑編）

Teku-Teku
FEATURE

雨畑硯

あめ
はた
すずり

七百余年にわたり
愛されてきた和硯の銘品

雨畑硯の材料となる原石は、墨をする際にやすりの役割を果たす硯面の粒子「鋒鉋」ほうぼうが細かく均一なことから、硯に最適であるといわれてきた。そして、その原石と向き合い、魂を込めて彫り続けてきた職人たちがいる。伝統を受け継ぎ守り抜く信念と、未来につなげる地道な努力、斬新な発想力。その目に、そして手に宿る職人それぞれの熱き思い。心を映す硯の世界がここから生まれる。

日本人の美意

硯とは自分の内面と向き合う精神の器

識と硯

甲斐雨端硯本舗・雨宮弥兵衛は、
元禄3年の創業以来、320年以上にわたり、その技を伝え続けてきた老舗。
13代目となる雨宮弥太郎さんは、東京藝術大学で彫刻を学び、
卒業後は海外の美術動向などにも影響を受けながら、故郷に戻り硯作家となりました。
一目で人の心を捉える、現代彫刻としての硯について、弥太郎さんが語ります。



甲斐雨端硯本舗・雨宮弥兵衛

雨宮 弥太郎さん

国民栄誉賞を受賞した将棋の羽生善治氏と
囲碁の井山裕太氏に記念品として贈られた硯
を制作。「勝負の世界に向き合う精神と、いかに
内容を深めていくかという信念は、ものづくりの世
界とも共通するものだと感じ、リスペクトを込め品
格のあるものを作りました」と弥太郎さん



弥太郎さん制作の硯「蝶想硯」(15.0×24.2×3.7cm)

芸術と工芸に境はない。
硯は精神を込めた現代彫刻。

「芸術の道に進む上で、アメリカの作曲家・ジョン・ケージの作品『4分33秒』に大きな影響を受けました。作品が作品として成り立つためには自分が能動的に何かを得て、それに意味を見いだすことが必要なのです。そして肝心なのは、自分がその世界とどう関わるかということです。学生時代にこのような芸術に触れたことで、何のために物をつくるのかを意識するようになっていきました。」

大学で彫刻を学び、ある程度の自信を持って家業に入りましたが、簡単にはいきませんでした。硯はただ面白い形だけでは良い物にならないことを実感したんです。当時、私の中では、芸術と地場産業的な工芸は別物だという感覚がありました。しかし今となってみれば、そんな境目は全く無意味だと感じますし、自分にとって硯は現代彫刻だといえます。硯は、実用的な物である



雨畑硯を磨り続けてきた武骨な手。「ものづくりをする人間として、この手を誇りに思っています」と弥太郎さん

一方、墨をすりながら自分の内面と向き合う精神的なオブジェでもあります。そんな硯を作るためには、いかに精神を込め深く追求していくかが求められるのです」

一つの素材との出会い。
自分と素材とが関係し合って
形は作られていく。

「雨畑硯の原石が採れる辺りは山深く、そこにたらずんでいるだけで、森の空気や大地の息吹といったものが自分の中に入ってくるように感じます。また、それは石の中にも込められているわけで、自分のイメージと、石が持つ歴史や存在感などが関係し合って一つの形になっていくのです。雨畑硯の魅力には、そういった地域性と密接な関係があると思います。この雨畑硯の素晴らしさを知ってもらい、硯が山梨の伝統工芸として存在していることを世に示していくために、私は、日本伝統工芸展にも作品を出し続けています。さらに海外にも広めていくために、見ているだけで心安らぐ禅ストーンのような感じで、実用性と同時に硯の造形的な魅力をアピールしていきたいと考えています」

文化を支えているというプライド。
そして見つめる未来。

「今の子どもたちのほとんどは、石ではない樹

脂製の硯と、墨汁を使っています。書道への興味を広げるといふ必要性もあるので否定はしませんが、私のところに体験学習に来る子どもたちの多くも、硯が本来何のためにあるのかを知らないというのが現状です。ですから硯を作るよりも硯で墨をする体感を重視しています。実際に墨をすってみた子どもたちからは『気持ちが悪く落ち着く』『いい匂いにする』などの声が聞こえてきます。すつた墨で、『夢』という字を書いてもらっていますが、墨の色やにじみ具合など、墨汁で書くのとは違ういろんな『夢』が表現されることに、子どもたちも楽しさを感じてくれています。

漢字を使っている限り、手で書く魅力はなくならないと思います。つまり硯は日本文化の中で、なくてはならないアイテムであることは間違いありません。その中で自分が硯の作品を作り続け、そして広めていくことで、微力ながら日本文化を支えている、そういうプライドを常に持つてやっているんです」



甲斐雨畑硯本舗・雨宮弥兵衛

富士川町鯉沢5411 / TEL.0556-27-0107

※『4分33秒』はジョン・ケージが1952年に作曲した3楽章から成る楽曲で、休止を表すTACET(タセット)が全楽章で指示されていて、演奏者は何も演奏しない、というもの。「現代音楽」の一つであり多くのアーティストに影響を与えている。

硯文化を守り育む 現代の名工



卓越した技能を持ち、その道の第一人者として厚生労働省の「現代の名工」に選ばれた^{ほうけんどう}峯硯堂本舗 代表の雨宮正美さん。大きなのみの柄を肩に当てながら体全体で彫る伝統的な技法は、師匠である父親の姿から学び、体得。原石を見て最初に抱いたイメージを追求して形にしていく正美さんの作品作りは、文字通り、石を見ると書いて「硯」となる、それこそが原点。時代の変化を受け止める中で、受け継いだ技を次世代に継承していく思いについて正美さんに伺いました。



偉大な父の背中を追い 硯の世界へ。

「家業に入ったのは昭和44（1969）年、高校を卒業した時でした。私は、父が硯を作る姿をずっと見て育ちました。伝統ある雨畑硯の製造販売業を営む家に生まれたからには、この仕事を継ぐのは当たり前だと思っていました。しかし、すぐに硯の作り方を教えてもらえないわけはありません。最初は、硯を磨く作業など下働きをしながら、父が彫る様子を見て覚えるだけでした。職人の技は見て盗む、ということです。のみは簡単には持たせてもらえず、ましてや貴重な原石は譲ってもらえないわけがありませんから、製品にできない不要な石を削ることから始めました。そのころは、製品の箱詰めや発送の作業をしたり、問屋に行つて注文を取つたりもしました。作るだけじゃなく、お客さんと会話をしたり、営業全般に携わつたりしたことで、情報も得られ勉強になりました。そうした経験があつたからこそ、自然と自分なりに納得のいくものができるようになったのだと思います。それでも父がいてくれるうちはまだ甘えていたんですね。父が亡くなって、これは大変なことだと初めて分かつたんです。そこから仕事に打ち込む姿勢が大きく変わりました。それが今から25年ほど前、40歳になったころです」

雨畑硯の伝統を守る、職人の信念。

「硯で墨をすつて筆で書く文化が全盛だった父の時代を知る私は、今のような時代が来るとは夢にも思っていないませんでした。時代の流れの中で、中国から硯や墨などがたくさん入つてきたこともあり、私たちの伝統的な硯産業は下火になっていきました。書道人口はまだ多いとはいえ、墨汁が使われることで硯で墨をする人は減ってきましたし、学校の習字の授業でも墨をする時間がないのが現実です。父が亡くなり本

格的に家業を引き継いでからは、まさに激動の時代でした。しかし、ここで雨畑硯の伝統と文化を絶やすわけにはいかない、そんな信念の下、今日まで頑張ってきているわけです」

硯を使う文化と

伝統技術を次世代に。

「硯を使った人が喜んでくれる、これが一番大切なんです。使ってもらつてその価値を分かつてほしいので、店に来てくれたお客さんとは本音で話をしますし、実際に硯で墨をすつてもらいます。本物を感じ取つてくれる人がいることは職人としての喜びなんです。しかし職人の数は減り続け、後継者の育成も課題です。ものづくりは職人の魂を込めるものですから、好きだから作りたいという強い気持ちを持つて職人を目指す人が来てくれたら、喜んで教えたいですね。

伝統を守つていくために、硯を使う文化を育む必要もあると思つているので、子どもから大人までを対象にした硯作りの体験教室も開いています。体験とはいえ石を彫るのは大変な作業だからこそ忘れられない思い出になり、硯への興味につながると思います。先日、子どもの頃体験教室に来た方が、店に訪ねて来てくれたんです。本当にうれしかったですね。これからも雨畑職人としての誇りを胸に、受け継がれてきた伝統文化を次世代につなげていきたいと思っています」



甲州銘石雨畑硯製造本家 峯硯堂本舗 代表

雨宮 正美さん



峯硯堂本舗

富士川町織沢5132 / TEL.0556-27-0209

和硯の銘品

「雨畑硯」の歴史

青黒き雨畑真石。
あめはたしんせき

山河の恵みというべきその原石を、職人たちは魂を込めて彫り続けた。
受け継がれること実に七百余年。

中国の端溪硯にも肩を並べるといわれるほどの和硯の銘品

「雨畑硯」の歴史をひもとく。

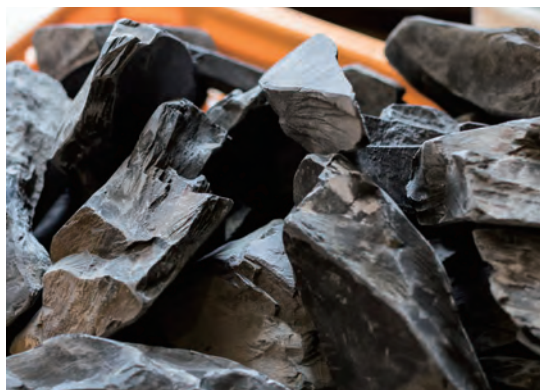




雨畑川上流にある坑道の入口付近



雨畑硯の里 硯匠庵

天野 元さん

坑道から採掘した原石(左) 硯の裏面に彫られた日蓮大上人像と雨畑硯についての記載がある『甲斐叢記 卷之四』(右) [硯匠庵蔵]

日蓮大上人の弟子・日朗上人が
雨畑川で見つけた青黒き石。
それが雨畑硯の
始まりだという伝説。

その発祥は、700年以上前とも伝えられている「雨畑硯」。早川町を流れる雨畑川の渓谷で採掘された原石は優れた職人たちの手により硯となり、多くの文人墨客に愛用されてきました。そんな雨畑硯の歴史と、地域の文化を伝承していく誇りについて、「雨畑硯の里 硯匠庵」の天野元さんに伺いました。

「永仁5(1297)年に日蓮大上人の弟子の日朗上人が七面山開山の帰り道に、雨畑川上流の河原で青黒い石を見つけたのが雨畑硯の始まりだと昔から言い伝えられています。今、この硯匠庵付近はダム湖になっていますが、昔はこの辺りも川でした。その谷治いの奥深くまで雨畑川が続き、その支流に稲又川という川があり、そこにある坑道から今でも原石を採掘しています。どうして硯を作ることになったのかは定かではありませんが、おそらく日朗上人が硯に対する知識や何らかの技術を雨畑の人々に伝えたのではないかとわれています。雨畑には武田信玄公の時代から金山があり、掘削技術が備わっていたこともあり、硯産業の発展につながったのではないのでしょうか」



大正時代の作業場の様子(写真提供:硯匠庵)



雨畑地区で唯一の硯職人・望月玉泉さん。硯匠庵内の工房で製作を続けている(左)

掘り出した原石のうち、硯にならなかった部分を有効活用しようと製品化した「雨畑ブラックシリカ」。石の持つ特性を生かし、マッサージ用かっさプレートとして美容分野での需要も高まっている(右)

雨畑硯は

全国的なブランドに成長。

希少性と信頼性を伝えるために

原石は「雨畑真石」と名付けられた。

「天明4(1784)年、一橋公に硯を献上したことがきっかけとなり、雨畑硯の名は世に広がり、盛んに生産されるようになりました。古文書によると、原石の採掘を装い、金を掘る者が現れたことで一時期幕府から原石を掘ることを禁じられた時代もあったようですが、雨畑の職人たちはそんな時代も乗り越えていきました。歳月を経て、第14代将軍徳川家茂公に硯を献上したことで再び採掘が許されると、雨畑硯の名はさらに広まり、その需要はますます高まっていきました。明治時代には最盛期を迎え、当時はこの地域に硯職人が100人以上いたそうです。一方、非常に人気が出たことで、偽物も出回るようになったため、『雨畑硯製造販売組合』を設立し、品質の保持と偽物の流通防止に努めました。大正時代には雨畑で採掘され、雨畑で作られた硯であることを証明するために、硯の裏面に原石名『雨畑真石』の文字と、職人の名前を掘り入れることとしました。

時代の流れとともに、高齢化や硯の需要の減少などから、雨畑地区の硯職人は減っていき、今では望月玉泉さんのみとなりました。しかし、どんなに時代が変わっても、硯がなくなることはない。私は思っています。墨と筆で文字を書くとい



雨畑硯の里 硯匠庵

雨畑硯をはじめとする銘硯や古文書などを展示している。また、硯職人・望月玉泉さんの作業風景を見学できるほか、硯彫り体験、小物・ストラップ作りなどのプログラムも充実。硯や和紙などの販売も行っている。

※各種製作体験は要予約

住 所／早川町雨畑709-1

T E L／0556-45-2210

開館時間／9:00～17:00

休 館 日／火曜日(祝祭日の場合はその翌日)、年末・年始

入 館 料／一般200円、中・高・大学生100円



う連綿と続いてきた文化は、日本人にとってなくてはならないものだと思うからです」

雨畑の人々が守り伝える 雨畑硯の文化。

「硯は早川町の大切な産業であり、文化です。これを後世に残していきたいといった思いから、平成12(2000)年に硯匠庵が誕生しました。現在は地域の人々で硯匠庵管理協会をつくり、町からの委託を受けて管理しています。硯匠庵では、雨畑地区のものである坑道の管理も行っています。原石はどこからでも採れるわけではなく、坑道の中でも硯に適しているのは、わずか40〜50センチの幅の部分だけです。このように大変貴重な雨畑真石は、鋒^{ほう}鋭と呼ばれる表面の粒子が非常に細かく均一であるため、すり心地が良いという大きな特長があります。書にたけた方に話を聞いてみますと、やはり日本の墨に一番合うのは雨畑硯だろうと言われます。私たちにとっては、昔から受け継がれてきた硯は産業であることに違いはありませんが、それよりもむしろ日本人として、この雨畑硯という文化を何としても残していかなければという思いを強く持っています」



心をほぐす優しい味わい。 雨畑の自然が育むオーガニック紅茶。

Ya!Tea倶楽部

代表 澤村 義之 さん

「紅茶作りは発酵作業があるのが特徴です。作業は一部機械化されていますが、やはり丁寧な手仕事

農業を使わずに育てた茶葉は
優しい香りと甘い味わい

「私は東京から移住し、縁あって雨畑地区の製茶工場で働くようになりました。お茶作りに関わる中で、その奥深さと面白さを知り、静岡などの茶どころに出掛けては勉強し、知識を深めました。雨畑は良質なお茶の産地でありながら、地域で消費されていたため、一般的にはあまり知られていませんでした。そこで私は雨畑茶の魅力を広めていこう、と考えるようになったんです。そんな中、天候不良の影響で茶葉がうまく育たない年がありました。その時に紅茶なら茶葉の大きさがふぞろいでも製品化できることを知り、紅茶の製造を始めました」

傾斜地があり、雨や霧が多い早川町雨畑地区は、お茶の栽培に適しているため、古くから製茶が行われてきました。幻の銘茶「雨畑茶」のおいしさを広めたい、そんな思いから紅茶作りを手掛けるようになった「Ya!Tea倶楽部」代表・澤村義之さん。キャンプ場の管理と造林業にいそしむ傍ら、紅茶作りにも情熱を傾ける澤村さんを硯の里キャンプ場に訪ねました。

雨畑茶の魅力を広めるため
研究を重ね紅茶作りに挑戦



「Ya!Tea倶楽部」がある 硯の里キャンプ場

傾斜地に広がる茶畑の間を登っていくと、硯の里キャンプ場に到着。「Ya!Tea倶楽部」はここにあります。

早川町雨畑495
TEL.0556-45-3256

食事処 やませみ

早川町高住625-3
TEL.0556-45-2010
ティータイム：14:30～18:00
定休日：月曜日 第3水曜日

「雨畑紅茶のシフォンケーキはこちらで楽しめます」と、ご自身が作ったシフォンケーキを手にする望月三智子さん



を大切にしています。そしてなんととっても素晴らしいのは雨畑地区の畑です。ここでは昔から農薬を使わずに生産してきたので、土の環境がよく、病害虫の心配がほとんどありません。ですからオーガニックで安心して飲める茶葉を作ることができんです。また、畑ごとに味も異なるので、相性のバランスを確かめながらブレンドしています。現在製造しているのは5月ごろに摘みとる一番茶のみで、優しい香りと甘みのある味わいが特徴です。今後は香り高い二番茶を使った紅茶も作っていきたいと思っています」



甘みのある穏やかな味わいの雨畑紅茶と
紅茶の製造過程でできる細かい茶葉を混ぜ込んだ、優しく香るシフォンケーキ



ご縁を紡ぎいつの日か 地域の魅力を伝える宿を

赤沢宿「宿の駅 清水屋」
スタッフ

串田 裕梨さん

移住先／早川町

大学在学中にアフリカに渡り、貧困問題について学びを深めた串田裕梨さん。早川町と出会ったのは、帰国後、復学にかかる学費を稼ぐために探したリゾートバイトがきっかけでした。

「早川町に初めて来た時、衝撃を受けたんです。日本にもまだこういう所があったんだと。川がきれいでも山は壮大…。そして何より人々の生きる力強さが素晴らしいと感じました。都会では食べ物や生活用品、足りないものは買って済ませています。早川町には足りないものを工夫して作る暮らしの知恵が根付いていたことに感動しました」

その後、自分の進路について模索し始めた裕梨さんは再び早川町を訪れ、縁あってジビエの処理加工会社で働き始めました。そして、町で過ごす時間の中で、いつか自分で宿を開きたいという夢を抱くようになったといいます。

「早川町には、何か思いを持って移住してきた人や、国内外から旅行者が訪れるので、その方々との出会いが楽しいんです。こういう所に来る人は、何か特別なご縁でつながる人なんだろうと感じ、人をもてなす仕事

— 山梨への移住相談はこちらへ — やまなし暮らし支援センター

専門相談員が常駐し、山梨への移住や就職について、ワンストップでお手伝い。移住セミナーや各種イベントも開催しています。

■やまなし暮らしセミナー

自治体職員や相談員による地域情報の提供や個別相談などを行います。

6/23(土) 韮崎市・北杜市セミナー…… NPOふるさと帰郷支援センター
7/ 7(土) 富士北麓セミナー…… NPOふるさと帰郷支援センター

東京都千代田区有楽町2-10-1

東京交通会館8F NPOふるさと帰郷支援センター内

TEL.03-6273-4306 FAX.03-6273-4307

E-mail:yamanashi@furusatokaiki.net

利用時間：火～日曜日 10:00～18:00

やまなし暮らし 検索



身延山と七面山を結ぶ参道の宿場町として繁栄した赤沢宿。赤沢宿は「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されており、歴史を感じさせる古き良き家並みが今に残っている。かつて旅籠屋を営んでいた建物を改装した「宿の駅 清水屋」は休憩所となっていて、お茶も楽しめる。



宿の駅 清水屋

早川町赤沢193

TEL.0556-45-3232

営業時間：9:00～16:00

定休日：水曜日

をしたと思うようになりました」

目標に向かって、群馬や静岡の旅館などで経験を積んだ裕梨さん。早川町の赤沢宿にある「宿の駅 清水屋」のスタッフに空きが出たことを知り、早く地域になじみたいという思いもあって3度目となる早川町での暮らしを始めました。

「宿には『衣・食・住』全てが詰まっていると思うんです。私はものづくりにも興味があるので、例えば、食べ物には地元産のもの、建物も昔の大工さんの趣向が凝らされているもの、着る物もきちんと織られたものなどを、大切にしたいと思っています。ものづくりを大切にする地元の方々への尊敬の気持ちも含めて、そういうものを集めた宿にするのが理想です。早川町には長い歴史を持つ『雨畑硯』もあります。お客さまにそんな地域の歴史や文化も伝えていきたいですね。

私は海外で暮らしたことで改めて日本の良さに気付けたように思います。早川町のことはまだ勉強中ですが、まずは、私が見つけた地域の魅力をSNSを使って英語で発信しながら、ご縁を大切に、いつの日か自分の宿を開くという夢をかなえたいと思っています」



街道の駅からの小さな旅

てくてくてくてくて

甲斐のくに

—第11駅—身延(雨畑編)



早川町雨畑は

700年もの長い歴史を持つ「雨畑硯」の里。

かつて「硯島村」と村名が付けられたほど

硯の産地として名声を博し、

「雨畑硯」は文人墨客に愛用されるブランドとなりました。

古き良き日本の原風景がそこかしこに残る雨畑の集落。

その伝統と文化に触れながら、

豊かな自然に囲まれた町並みをてくてくと…。



01

ヴィラ雨畑

硯島小・中学校の跡地を利用して建てられた、自然の恵みを満喫できる宿泊施設。地元産の旬の食材やジビエを使った料理が楽しめる。体育館も併設。



02

すず里の湯

ヴィラ雨畑にある温泉。宿泊者だけでなく、毎日帰入浴の利用がてきえる。館内はしっとり落ち着いた雲田気、女湯には露天風呂がある。



03

雨畑硯の里
硯匠庵

銘硯や古文書が展示され、雨畑の歴史も学べる。硯作りなどの体験や職人技の見学ができるほか、雨畑硯やブラックシリカなどの販売もしている。



04

雨畑湖のつり橋

一度に渡れるのは5名まで。スリルと絶景が楽しめる人気の散策スポット。豊かな自然が織りなす四季折々の眺めも素晴らしい。



05

本村集落

かつて雨畑硯の生産拠点であった本村集落。今でも静かな町並みの中に当時の看板や店舗が残る。繁栄した時代に思いをはせながら歩きたい。



06

正徳寺

明応5(1496)年に日意上人が開山したといわれている。ここで得度した日謙上人は、少年時代の石橋湛山(第55代内閣総理大臣)が預けられていたという。



07

六社神社

源経基を祭っている。春祭りや秋祭りも地元住民で盛大に行われている。隣接する公民館には桜の古木があり、その根元には若者が力試しをした「カ石」もある。



08

見神の滝

落差約40メートルの直瀑(ちよくばく)。2段目の滝つぼに金があるといわれ、その昔、何人もの若者が金を取るうとしたが断崖絶壁のため失敗したとの伝説が残る。



てくてく
歩きの
途中で...

チャーミングなお母さんたちに出会いました。「サンショウの葉っぱに、しらす干しを入れて、しょうゆで煮るんだよ」と摘みたてのサンショウを抱えてニコリ。

坂道もなんのその、よく歩くのが元気の秘訣。^{ひけつ}「毎年8月15日は雨畑湖で花火を上げるよ。きれいだから見においで」と話してくれました。

雨畑湖。
美しい湖面に映る、四季折々の風景。



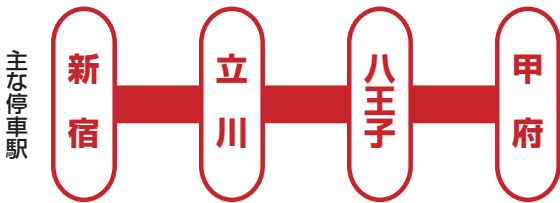


雨畑湖の底には、かつての町並みの一部が静かに眠っている。エメラルドグリーン湖面にさざ波をたてながら吹きゆく季節の風を感じていると、雨畑の里の歴史の声が聞こえてくるようだ。毎年8月15日に開催される雨畑湖上祭では、大輪の花火が夜空を彩り、その音は山々にこだまするといふ。長い歴史の中で、郷土の文化に誇りを持ち続けてきた人々の思い、そして雨畑湖を取り巻く風景。ここは大切なものを思い出させてくれる場所だ。



山梨へは中央線の特急列車でどうぞ!

便利で快適な特急「あずさ」・「スーパーあずさ」・「かいじ」



特急列車のご予約は「えきねっと」で!



詳しくはホームページをご覧ください。



www.eki-net.com

- パソコン・スマホからラクラク簡単予約!
- 指定席が発売開始日のさらに1週間前から事前受付OK!
- 指定席券売機でスムーズにお受取り!

※一部の列車や一部の区間は「えきねっと」でお取り扱いしていません。
 ※乗車日の1ヶ月+1週間前から指定席を事前に申し込むことができます。実際の発売手配は乗車日1ヶ月前の午前10時からとなります。
 ※満席等の理由により、座席をご用意できない場合があります。※運転日や運転時刻、停車駅などは事前にご確認ください。
 ※掲載内容は2018年5月現在の情報です。ご利用の際はホームページなどで最新情報をご確認ください。※路線図や写真はイメージです。



山梨 **てくてく** *Toku-Toku*
 VOL.11 | 2018 SUMMER

平成30年5月1日[季刊]
 第11巻月号



やまなし森の印刷紙
 この印刷紙には、
 FSC®森林管理認証を
 取得した山梨県有林からの
 木材が使用されています。

山梨県

山梨県広聴広報課 発行 〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1
 TEL. 055-223-1339 FAX. 055-223-1525 制作 山梨日日新聞社